

学生生活

開校当時の教育

山口高等獣医学校の開校当時は、すでに教育が十分に行える状態ではなかった。

初代校長の海老原初太郎は農林省馬政局に勤務していたが、県知事の懇請により、昭和19(1944)年7月に山口高等獣医学校の校長として着任した。発足当時の教員には井原英一（解剖・病理学）、山下与四蔵（家畜）、田中守（体育・生徒主事補）、池上至（独語・人文・道義・生徒主事）、溝口五郎（化学・生理学）、青木猷彦（化学）がいた。

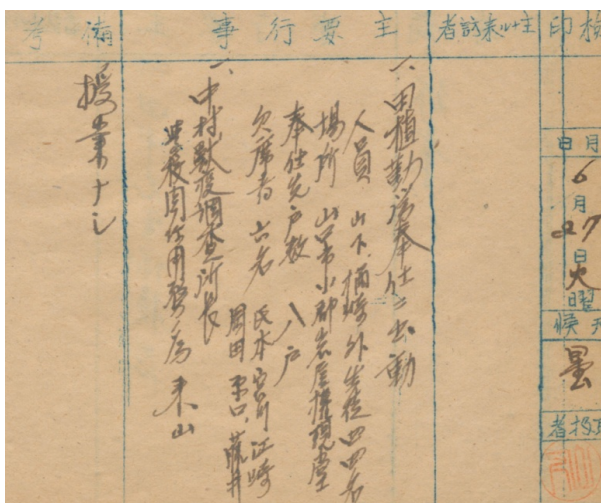
物資不足の中、教科書やノートもままならなかったが、解剖・病理学、家畜学、体育、独語、人文学、化学などの授業が行われた。解剖・病理学担当の井原先生の授業では、ラテン語の原名が連なり、多くの生徒が頭を悩ませたという。当時は日曜日にも授業を行うことがあった。

また、解剖実習の他に牧場、農場での実習も行われた。小郡町の北東、八方原に学校実習園があったが、戦時下の食糧不足もあり1～3期生は牧場実習の代わりに草刈やサツマイモ、南瓜、大豆の植え付けを行った。

昭和20年8月、食糧事情の悪化と赤痢患者の発生で栄養状態が極限に達したため、ついに授業は中止に追い込まれた。



当時の教科書(旧農学部所蔵)
当時は馬学が中心であった



(上)草刈り実習の様子
(左)昭和19年校務日誌
小郡岩屋権現堂に田植勤労奉仕に出動した記録
当時は勤労作業も多く行われた

寮での生活

第1～2期生については、1年生の間は全寮制であった。寮は本校舎から徒歩5～6分の蔵敷通りにあった旧制鴻城中学の寄宿舎の跡地で、粗末な木造の建物であった。寮は班単位で規律正しい生活だったという。別棟に食堂があり、主食は白米に、麦、コウリヤン、大豆、大豆粕など種々雑多に混合されていたもので、味噌汁は塩味に少々色がついている程度であった。食糧不足のため、賄い方は大変な気遣いや苦勞をしたようであるが、成長盛りの学生は食事が足りず、寮を抜け出し近所の芋畑に忍び込み暗がりでもさぼったという。

昭和20(1945)年、赤痢患者の発生により、運営が困難となったため9月10日で寮は閉鎖となった。

(右)昭和19年寄宿舎炊事部日計表

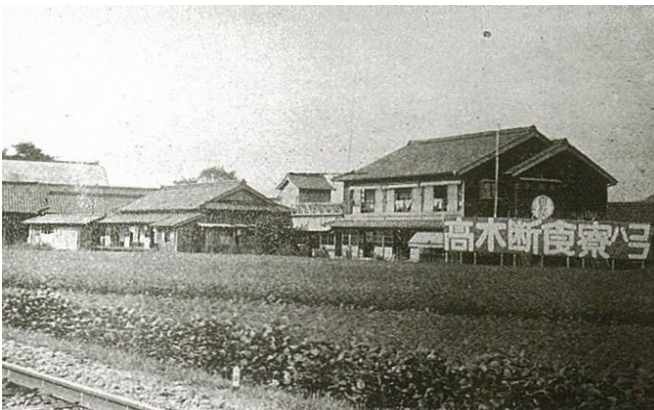
「一人出征に付夕食より差引」とあり、時代がうかがえる

4月18日 水曜 炊事部日計表

区	現在高	一日量	残高	取立	備
主	米	211.63kg	17.4kg	194.23kg	朝飯 菜の味噌汁 菜の味噌汁
	麦	21.75g		21.75g	
	粉				
	豆				
副	豆				晝飯 大根の煮付 大根の煮付
	芋				
調味料	味噌	9貫7匁	550匁	9貫7匁	夕飯 菜の味噌汁 菜の味噌汁
	醤油	3斗14	1斗	3斗	
	塩				
燃	100把	5把	95把		

一人出征に付夕食より差引あり 辨當持込

下宿での生活



高木断食寮(山口県立山口図書館所蔵『高木式六法衛断食体験録』より)

高木式断食療法で全国に名を知られ、県内外から多くの入寮者があった

断食療法に加え食事療法、生体療法なども行われていた

2年生になると下宿生活が許された。食事は賄屋が多かったが、一日中お腹を空かせた学生たちは、町で食べ物屋を探して歩いた。物はなくても心は豊かで、ゲーテに興じ、ハイネを愛し、ニーチェを論じ、古本屋で見つけた哲学書を回し読みもした。

学校近くの高木断食寮にも多くの学生が下宿をしていた。断食して療養に専念するこの建物の一室で、ある学生がすき焼きをしたため、窓を開放していた患者の部屋に食欲をそそる香りが流れ込んでしまいひんしゆくをかったというエピソードもある。

学生生活のひとコマ



校舎前にて



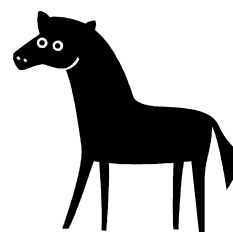
第2回記念開校祭



(左上)高木断食寮にて

(上)バレー部

(左)小郡駅構内にて



山口獣医畜産専門学校へ改称

昭和20(1945)年、実業、技術系高等専門学校が全国一律に専門学校と改称することにもない、山口獣医畜産専門学校と改称した。

終戦後は社会の混乱と共に学園生活も乱れ、翌年4月には編入者を含めても学生数が40名を下回る状態となった。その後昭和23年末をもって、下関市の長府校舎へ移転となり、一時は廃校の危機に瀕したが、翌年には新制山口大学として移行することとなる。